

---

# 瀬戸内晴美（寂聴）と中国との関わり

——謝冰心、巴金との交流を兼ねて——

虞 萍

## 要 旨

小論は瀬戸内晴美（寂聴）と中国との関わりを彼女の北京での新婚生活、戦後中国に滞在する状況、帰国後の離婚、日中国交正常化以来初めての文化界代表団の一員としての訪中（1973年2月23日-3月14日）に焦点を当てて整理した。瀬戸内の二回目の訪中時の1973年2月25日に、北京の空港へ迎えに来た謝冰心に会った。小論では、瀬戸内の二回目の訪中の経緯、謝冰心、巴金との交流状況について分析した。瀬戸内は1973年11月に出家した後、中国を頻繁に訪問した。瀬戸内が中国を訪問した背景・時期・出来事、中国知識人との交流などを整理することによって、瀬戸内が中国に抱く感情、日中友好に貢献したことについて探った。

## はじめに

瀬戸内晴美<sup>1)</sup>(1922-)は1943年(21歳)10月から1946年(24歳)6月まで元夫である酒井悌<sup>2)</sup>(1913-1992)に従って北京に滞在した。北京で娘を出産し、終戦翌年の1946年8月、親子三人で、徳島に引揚げた。1947年秋、一家三人で上京したが、1948年、26歳の瀬戸内は小説家として世に出ることを目指して家族を捨てて出奔し、1950年2月、正式に協議離婚した<sup>3)</sup>。帰国した後も、瀬戸内は中国のことを決して忘れてはいなかった。本格的に作家デビューした翌年の1957年に発表された「女子大生・曲愛玲」は、戦時

下の北京を舞台にしている。この作品で、瀬戸内は新潮同人雑誌賞を受賞した。瀬戸内が再度中国に足を踏み入れたのは1973年のことであった。しかし、瀬戸内がこの訪中でどのような活動を行い、中国知識人とどのような交流がなされたかは、明らかにされていない。また、瀬戸内がなぜその旅を皮切りに毎年のように中国を訪れるようになった<sup>4)</sup>のか、中国にどんな感情を抱いていたのか、この感情はどのようにして生まれたのかについても十分な研究は行われていない。瀬戸内はこの二回目の訪中から帰国し、日中友好協会訪日代表团55名(1973年4月16日-5月18日)の接待を終えた後で、作家井上光晴(1926-1992)との不倫関係を解消し、出家に踏み切り、瀬戸内寂聴と改名した<sup>5)</sup>。瀬戸内はなぜ自身の訪中と訪日代表团一行の接待を終えた後というタイミングで出家したのか、その因果関係も明らかにされていない。

長尾玲子が作成した「瀬戸内寂聴 略年譜」(尾崎真理子著『瀬戸内寂聴に聞く寂聴文学史』中央公論新社, 2009年), 齋藤慎爾の『寂聴伝——良夜玲瓏』(新潮社, 2011年), 瀬戸内寂聴が編年で記録した自伝『晴美と寂聴のすべて』(集英社, 1988年)・『晴美と寂聴のすべて 2 (1976-1998年)』(集英社, 2007年)・『まだ もっと, もっと 晴美と寂聴のすべて・続』(集英社, 2010年)では、瀬戸内が1973年以降頻りに中国を訪問したことが記載されているのみで、彼女が中国でどのように行動し、どのような活動を行ったかについては詳しく記録されていない。

『当代中国文化名人伝記画冊 冰心』(卓如撰文, 卓如, 範達明編文, 範達明編纂, 浙江摄影出版社, 1995年, p. 100)の写真242では、瀬戸内晴美, 謝冰心<sup>6)</sup>(1900-1999)と浩然<sup>7)</sup>(1932-2008)がソファに座っている。しかし、この写真については「謝冰心, 浩然是, 外国からの来賓を接待している」と書いてあるのみで、瀬戸内の名前は記載されていない。卓如著の『冰心年譜』(海峡文芸出版社, 1999年)と王炳根編著の『冰心年譜長編』(〈上, 下〉, 上海交通大学出版社, 2019年)には写真242が掲載されていない。

小論では、冒頭で触れた疑問について整理し、前述の写真242を関連さ

せて考察したい。具体的には、まず瀬戸内の北京での新婚生活、戦後中国に滞在する状況、帰国後の離婚のいきさつについてまとめる。次に、瀬戸内の二回目の訪中の経緯、謝冰心、巴金との交流状況について分析する。瀬戸内は1973年11月に出家した後、中国を頻繁に訪問した。瀬戸内が中国を訪問した背景・時期・出来事、中国知識人との交流などを整理することによって、瀬戸内が中国に抱く感情、日中友好に貢献したことについて探りたい。

## 一 瀬戸内晴美の中国滞在（1943年10月-1946年8月） ——結婚生活に着目して

### （一）北京での新婚生活

瀬戸内晴美は1942年8月、20歳の時に元夫と見合いをし、婚約した。1943年2月、成人したばかりの瀬戸内は元夫と徳島で結婚した。結婚後、元夫は単身北京に赴任した<sup>8)</sup>。瀬戸内が中国を初めて訪れたのは1943年10月で、21歳の時であった。彼女は同年9月まで東京女子大学に通っていたが、戦争による繰り上げ卒業後、卒業式にも出ずに10月には元夫とともに北京へ渡り<sup>9)</sup>、終戦翌年の1946年8月に日本に引揚げた。瀬戸内は小学校三年生の時から小説家になることを志していたが、東京女子大学に入学後の三年半の間に、小説家になる夢は現実的ではないと考え、早く結婚して日本から出たいと考えるようになった。元夫とは、結婚後に北京で暮せるということだけが条件で、縁談を決めた<sup>10)</sup>。

瀬戸内の新婚生活は王府井から徒歩三分の距離にある東単牌楼三条胡同の紅樓飯店で始まった<sup>11)</sup>。1944年6月、輔仁大学学長細井二郎宅に仮住まいした後、輔仁大学の教員宿舎に転居し、8月に長女を出産した。瀬戸内は北京に約三年間滞在したものの、天壇も万里の長城も知らないという暮らしぶりであった。元夫は中国古代音楽史が専門で、はじめ外務省留学生として北京へ渡ったが、留学期間終了後も北京に残って研究を続けることを希望し、北京師範大学の講師となった。彼は中国の風土と人を愛し、日本と中国の共

存共栄の捨て石になりたいと口にするような人物であった。周囲に集まる日本人も、ほぼ彼と同様の立場で似たような考え方を持っていた。当時、瀬戸内は彼らの話を鵜呑みにし、自身の生活自体もまた日中の楔の一つになっていると思っていた<sup>12)</sup>。

瀬戸内の北京での新婚生活は決して順風満帆ではなかった。彼女は北京に着いたその日から、元夫の一向に上がらない給料と、鰻上りの物価とのギャップに振り廻され、生まれてはじめての貧乏暮らしを味わい、出産、七度にわたる引っ越し<sup>13)</sup>、元夫の現地召集と引き続く生活には何のゆとりもなかった<sup>14)</sup>。1945年6月、元夫が現地召集されて、瀬戸内は1歳にも満たない娘と西単頭条胡同に転居した<sup>15)</sup>。瀬戸内の回想によると、戦争が自身に直接結びついてきたのは、その時であった。彼女は娘と親類一人ない北京に無一文でとりのこされた。当時、元夫の職場が輔仁大学から北京大学に変わったばかりで、内地からの任命がいつ来るかわからず、北京大学の給料が出ないという不安な状況に陥っていた。その後、内地からは手紙も届かなくなったが、瀬戸内はその頃から俄然活動的になった。母が七つの行李につめて持たせてくれた嫁入り支度の着物を、一枚も残さず中国人に売った。「しつけもとらないまま、一度も手を通すひまもなかった着物が、二年の親子の生命を支えていたことは想像もしなかった<sup>16)</sup>、という生活ぶりであった。

瀬戸内が北京で最後に下宿したのは、西単頭条胡同の片隅の赤い門の中にある建物の504号室で、部屋からは暗い夜空に浮ぶ北海公園の白塔が見えた。瀬戸内はそこで終戦を迎えた<sup>17)</sup>。

次節では、瀬戸内晴美の戦後における中国滞在、北京から帰国後の離婚までのいきさつについてまとめたい。

## (二) 戦後における中国滞在

終戦後、日本へ戻りたくない元夫に従い、瀬戸内と娘も終戦の翌年まで北京に残った。中国が好きで、中国に骨を埋めたいという元夫の意見に、瀬戸

内は一も二もなく賛成して、帰国する日本人の集結場所には行かず、北京の胡同にひそんで非合法的な生活をつづけることにした<sup>18)</sup>。

終戦の日を境に、瀬戸内は心境の変化があった。元夫と結婚以来何ひとつ話らしい話をしていないことに気づいたのである。元夫は瀬戸内のこのような心の変化に特に気づいていない様子であった。彼らは日常生活こそ共にしていたが、夫婦の間に本当の会話はなかった。瀬戸内はその時の心の中のもどかしさを伝えようとしても、通じあうことばのないことを発見してしまった<sup>19)</sup>。

終戦しても日本に戻りたくない日本人たちは、瀬戸内一家が住んでいる胡同に集まって、皆で共同生活を始めた。そんな状況は一年後に露見し、ある朝、中国側からトラックが来て、瀬戸内一家と共同生活をしていた日本人を強制的に乗せて、塘沽貨物廠に運んだ。そこは日本人が帰国する船に乗りこむまでの最後の集結地であった。瀬戸内は着のみ着のままに近い状態で、そこで一カ月ばかり暮すことを強いられた<sup>20)</sup>。

若き瀬戸内は北京に滞在していた敗戦直後、恐怖感を抱き、中国人に殺されるのではないかと心配をしていた。しかし、一家は多くの親切な中国人に助けられた。彼女は次のように回想している。「日本人が中国人に対して目に余る横暴をほしいままにしている光景を、連日目にしていた私は、敗戦後、日本人は皆殺しにされるだろうと思っていたのに、弱者になった私たち一家に示してくれた彼等の深い厚意と親切に対してどれほど感謝してもしたりない気がする<sup>21)</sup>。」

北京から強制的に送還された瀬戸内は、いつか、中国に晴れて行かれる日が来たら、一度は北京を訪れたいという望郷に似た熱い思いを持ち続けていた<sup>22)</sup>。しかし、日中の国交がすぐに回復したわけではない。帰国後の瀬戸内にとって、中国は近くて遥かな幻の国になった。1950年2月、瀬戸内は元夫と正式に協議離婚した。

次章では、日中国交回復後、瀬戸内晴美の二回目（1973年2月23日-3

月14日)の訪中の経緯について整理し、中国の女性作家謝冰心との出会いと、二人の具体的な交流状況について分析したい。

## 二 瀬戸内晴美の二回目の訪中(1973年2月23日-3月14日) ——謝冰心との出会いとその後の交流を兼ねて

### (一) 瀬戸内晴美の二回目の訪中の経緯

瀬戸内は1946年8月に帰国して以降、再度中国に足を踏み入れたのは約27年後の1973年2月23日であった。帰国当時24歳だった主婦は駆け落ち、出家、離婚、不倫、本格的な小説家デビューなどの経験を経て、50歳の売れっ子小説家になっていた。瀬戸内は日中国交正常化(1972年9月)以降、初めての文化界代表団の一員として、日本中国文化交流協会<sup>23)</sup>から派遣され、中国人民対外友好協会(政府の支援を受けた民間外交を促進するための団体)の招待を受けて、同3月14日まで広州、北京、上海、杭州、最後はまた広州に戻るというルートで中国を訪問することになった<sup>24)</sup>。前述したように、瀬戸内は戦前北京に三年間滞在した経験があり、「個人的には中国人と友好的に暮し、誠実につき合ったつもりだったが、大局的に見れば侵略国の一員として、暮したという事実は消すことが出来ない<sup>25)</sup>」と感じていたため、どこかに忸怩たる思いを抱いたまま、この訪中団の一員になった。出発前に瀬戸内一人だけが、解放前の中国語は使わないように、と注意された<sup>26)</sup>。

一行は88歳の団長土岐善麿(1885-1980)、58歳の副団長戸坂康二(1915-1993)、団員には映画脚本家井手雅人(1920-1989)、エスペラント研究家徳田六郎(1904-1995)、政治評論家小松文麿(生没不詳)、東京混声合唱団指揮者の田中信昭(1928-)、歌人の篠弘(1933-)という各界からのメンバーに加えて、協会からは白土吾夫(1927-2006)が秘書長、原信之(1958-)が秘書として参加した<sup>27)</sup>。10人のうち、解放後の北京をはじめて訪れた者は4人で、解放前の北京に住んだことのあるのは瀬戸内だけであった<sup>28)</sup>。

団長土岐善麿は一生のうち三回訪中した。最初の訪中は75歳の時で、中

国文字改革視察学術代表団の団長として、1960年3月28日から35日間であった。同行者は有光次郎、倉石武四郎<sup>29)</sup>、実藤恵秀、高杉一郎、原富男、松下秀男、宮沢俊義、村尾力、村岡久平の9人であった。新華社1960年4月10日の報道によると、中国文学芸術界連合会はその日にパーティを開き、土岐団長率いる中国文字改革学術代表団を歓迎した。謝冰心もこのパーティに参加した<sup>30)</sup>。土岐の二回目の訪中は、1964年10月（79歳、日中文化交流協会団長として）で、今回は三回目の訪中であった<sup>31)</sup>。

瀬戸内は当時の中国の事情に精通してはいなかったが、自分の小説家の目と感性でいまの中国を見て来よう<sup>32)</sup>、と考えた。一行は香港の九龍から列車に約2時間乗り、イギリス租界地の最北端羅湖に着いて、初日は広州迎賓館に泊まった<sup>33)</sup>。羅湖と深圳の間にかかる境界線の白いアーケード状の橋を渡る際に、いきなり中国の音楽がスピーカーから聞こえてきたとき、また広州の町にあふれる中国人の波を見たとき、瀬戸内は奇妙に落ち着いて、故郷に戻ったような気分であった<sup>34)</sup>。

広州の次に、一行は北京に移動した。瀬戸内はそこで中国の女性作家謝冰心に出会った。

次節では、瀬戸内と謝冰心との交友について整理したい。

## （二）瀬戸内晴美と謝冰心との交友の状況

### （1）瀬戸内晴美と謝冰心の北京での出会いと交流

訪中団一行は1973年2月25日午後6時半、広州から出発し、夜10時頃に北京の空港に着いた。中日友好協会会長寥承志をはじめ、20人余りの出迎える人々の中に、謝冰心も入っていた。謝冰心は10名の訪中団員の中で唯一の女性である瀬戸内の方へ歩み寄り、手をとって握りしめた。瀬戸内の回想によると、当時謝冰心の手は凍え切っていたが、小さく柔らかかった。彼女たちは握手をかわし、記念撮影をした。謝冰心に手を握ってもらった時、瀬戸内は北京へまた来られたという強い感動が湧き起った<sup>35)</sup>。この日が瀬戸

内と謝冰心が出会った日と考えられる。

瀬戸内と謝冰心は1973年3月3日にも会っていた。当日、謝冰心は午後2時半から日本文化界代表団の宿舎になっていた民族会館を訪問し、瀬戸内に会った。中国現代文学館所蔵の謝冰心の旧蔵書に、瀬戸内が謝冰心に寄贈した自身の作品『遠い声』（新潮社、1971年）と『余白の春』（中央公論社、1972年）がある<sup>36)</sup>。この2冊の本の見返しにそれぞれ「謹呈謝冰心先生 1973年3月3日、瀬戸内晴美」[謹呈謝冰心先生 瀬戸内晴美, 1973年3月3日]というサインがあった。

訪中団一行は北京に10日間滞在した。その間に、詩人である李季<sup>37)</sup>(1922-1980)らは一行にずっと付き添って、通訳や案内をした<sup>38)</sup>。瀬戸内は新婚時代に過ごした北京の部屋にも行き、彼女が再度この部屋に足を踏み入れた時、不覚にも涙をこぼした。この感情について瀬戸内は次のように述懐している。「これは昔の北京をなつかしいと思ったのではなく、昔の自分の若さを惜しんだのでもない。北京を出発点とした自分の半生の歳月のあわただしくおびただしい日々の重みに、まるで死の直前ででもあるかのように一挙に襲われたためであった<sup>39)</sup>。」

この旅を皮切りに、瀬戸内は毎年のように中国を訪れるようになった<sup>40)</sup>。

次節では、謝冰心の七回目の来日（1973年4月16日-5月18日）を通して、瀬戸内晴美と謝冰心の日本での再会および交流の状況についてまとめる。

## (2) 瀬戸内晴美と謝冰心の日本での再会——謝冰心の七回目の来日（1973年4月16日-5月18日）を中心に

1973年3月8日、『毎日新聞』は「寥承志氏来日きまる 来月、友好団率いて謝冰心女史ら五十人」という題で、約一カ月後の日中友好協会訪日代表団の日本訪問について報道した。謝冰心は曾て六回の来日経験があり、日本には多くの友人がいるほか、その作品『寄小読者』が日本の読者にもよく読まれていることをかわれて<sup>41)</sup>、日中友好協会訪日代表団の一員になった。



1973年4月16日-5月18日の33日間<sup>42)</sup>、謝冰心は日中友好協会訪日代表团（55人）に参加（団長は廖承志、副団長は于会泳）した。一行は国交回復後初めての閣僚級の交流を実現した。4月16日<sup>43)</sup>、一行は東京の羽田空港に到着した。4月19日、田中角栄首相が新宿御苑で開催した桜を見る会に参加し、謝冰心が田中首相と握手した写真が『当代中国文化名人伝記画冊 冰心』（前掲、p. 90、写真217）に収録されている。日本の各界6,000あまりの人が参加し、謝冰心は心友である中島健蔵（1903-1979）、白土吾夫（1927-2006）に会った<sup>44)</sup>。4月20日、謝冰心は楚図国、周一良、李季、古元らと「中華人民共和国河南省書像石、碑刻開幕式」に参加した後、11時半に井上靖（1907-1991）宅を訪問し、17時半に、有吉佐和子（1931-1984）宅をも訪問した<sup>45)</sup>。4月21日、謝冰心は李季と共に瀬戸内宅を訪問した<sup>46)</sup>。『当代中国文化名人伝記画冊 冰心』（前掲、p. 91）所収の写真220はその時の記録である。

5月12日、謝冰心は大阪で開催された日本新劇人懇談会に参加した。その録音によると、瀬戸内は中国を訪問している間（1973年2月23日-3月14日）に、謝冰心に、文化大革命の時、中国の作家としてどのような経験をし、どのような生活を送ったか、ということを探ねた。謝冰心は瀬戸内のこれらの質問に答え、二人は文化大革命のことについて語り合った。その時瀬戸内はメモも取っている<sup>47)</sup>。

瀬戸内晴美にとって、1973年は人生の大きな節目となった。以上述べたように、1973年、瀬戸内は27年ぶりに中国再訪を果たした（2月23日-3月14日）と共に、日中友好協会訪日代表団の接待（4月16日-5月18日）でも活躍し、謝冰心などの中国知識人とも交流した。1946年8月に強制的に日本に送還されて以来、中国を再訪することは瀬戸内の長年の夢であった。瀬戸内のもう一つの夢は小説家になることであった。彼女は小学生三年生の時からすでに小説家になることを夢見ていた。私生活では、駆け落ち、家出、離婚、不倫などを経験し、売れっ子作家の地位に登り詰めていた。生活にお

いては何の不自由もなく、経済的にも余裕があって、まさに人生にゆとりが出てきた時、瀬戸内は当時8年間不倫をしていた作家井上光晴との関係を解消し、人生をリセットするかのように、出家することを決心した。

次章では、瀬戸内晴美から瀬戸内寂聴になる出家への道のりについて整理したい。

### 三 瀬戸内晴美から瀬戸内寂聴へ——出家への道のり

40歳を過ぎた頃、人生の多くの辛酸や感情の波瀾を経験してきた瀬戸内は、俗世に嫌気がさし、「自ら枯れた」感覚を持ち始め、人生の束縛から抜け出すことを渴望し、気の向くまま流浪を続けた。47歳の時、瀬戸内は随筆「放浪について」で、このように書いている。「出家して遁世することと放浪することが、今、私の日夜のあこがれになり、私の心を誘っています。」当時、瀬戸内は将来には、二つの道が並んでいると考えた。一つは放浪で生命を終える道、もう一つは自分で生命を終え、徹底的な解脱を図る道。あるいは出家遁世して、鳳凰涅槃のように、「過去」を捨て去り、「未来」に生きる道を選ぼうか、と葛藤していた。

瀬戸内は出家を志して多くの寺院にあたるも拒否されていたが、1973年9月中旬、今春聴（今東光）大僧正に相談したところ、すぐさま理解と了解が得られた<sup>48)</sup>。得度の式は11月14日午前10時から中尊寺本堂において行われ、法名は「寂聴」になった<sup>49)</sup>。翌年、比叡山で60日間の行を経て、京都嵯峨野で寂庵と名付けた庵に住まった。戸籍上の氏名は、1987年に天台寺住職となった際に「瀬戸内寂聴」に改名した。瀬戸内は自身の出家について「人の愛に飽きたのではなく、人の愛を澄明に洗いたいと思うだけだ<sup>50)</sup>」、とまとめている。彼女は当時の生活ぶりおよび出家する前の心境について以下のように述べている。

作家として活動し、いろいろなアンテナをもっていた。すると、そのうちのひとつである自分の触手のようなアンテナに、非常に暗いものがひっかかってきた。世のなかは第一次オイルショックで、大騒ぎしていた。（中略）芥川龍之介の「漠」とした不安を感じていた。私はその頃、売れっ子作家で仕事はたくさんあった、男もいた。小説を書くコツも覚え、お金もあった。一人で使うためすごい贅沢もでき、なに不自由はしていない。しかし、そういうものでは補えない、なにか非常に「漠」とした不安を感じるようになっていた。

そのまま作家活動を続けていってもなにもならないと思うようになった。こういう生き方はちょっと違うじゃないかと思ったりした。だからといって、他にやりたいことがあったわけでもない。なにをどうしたらいいかもわからない。だいたいやりたいことは全部やると、その頃はそう思っていた。

それ以上なにも欲しくはなかった。五十歳で手に入れたもので十分だと思った。

私はそれまでずっと、文学というものに、非常に質の高いものを思い描いていた。しかしその頃、自分の才能というものが、なかなかそこまでいかぬことに気づきはじめていた。天才は若くして死ぬものだが、「私は五十年も生きてしまった凡才だ」と思うようになっていた。流行作家になったって虚しい。恋愛したって愛や情熱は必ず衰えるときが来るし、自分の愛や情熱さえまもらない。なにしても虚しいと思った。

なんでも自分の力で努力し、獅子奮迅し、開拓してきたと思い込んでいたが、一人生きていくうえで、自力で果せることなどは、ほんの一部だということもわかってきた。それからの後、このままずっと生きてって同じことの繰り返しになる。あまり喜びもなく、充足感も得られないと思えた。この状態で生きるなら死にたい、自殺した方がいいじゃないか、とさえ思った。

しかし、その頃、三島由紀夫さんが割腹自殺を図り、川端康成さんも自殺で亡くなられ、作家の自殺がセンセーショナルに報道されていた。だから、流行を追うような死にも嫌だったので、「生きながら死ぬ方法はないだろうか」と考え、それで出家した。私にとって出家するということは、「生きながら死ぬ」ということである<sup>51)</sup>。

瀬戸内にとって、女が髪を断つということは、平安の昔ならずともまだ一種の自殺に近い悲壮さがあった<sup>52)</sup>。得度して以来、瀬戸内は20歳も若がえっ

たような感じがし、五十年の垢と疲労のすべてが洗い流され、細胞がすべて瑞々しくよみがえり、精神的活力があふれるようになった<sup>53)</sup>、と実感していた。

瀬戸内を仏縁に導いた今東光は、瀬戸内という「才女」の特質を「一見して才女に見えるのは実は本当の才女ではないのだ。彼女の生涯を通じて如何に誠実に生きたか。それは恋愛に対しても、文学に対しても、信仰に対しても、一向専念に生き抜いたのを僕は才女と言いたいのだ<sup>54)</sup>。」と彼女を高く評価している。出家することによって、「晴美」はいなくなり、「寂聴」が新たに生まれた。「生きながら死ぬ」とは言うものの、瀬戸内の中国に抱く興味、中国への愛は薄れていない。彼女はその後の人生においても中国に度々渡り、旅をし、中国知識人と交流を深めた。

断髪し出家する前、瀬戸内は北京に三年間の滞在し、その後27年ぶりに訪中の夢を果たし、合わせて二回中国に渡った。前述したように、瀬戸内は二回目の訪中時の1973年3月3日に謝冰心に自身の二冊の著書を贈呈していたため、その日に二人は会っていた。写真242がその日の写真であるかどうかは現時点では確定できないが、瀬戸内が1973年11月に出家して断髪したことを考えると、写真242は瀬戸内の二回目の訪中時に撮ったものと判断できる。

次章では、瀬戸内寂聴としての中国訪問を整理する。また、謝冰心の八回目の来日（1980年4月1-17日）と『巴金日記』を通して、出家後の瀬戸内と謝冰心・巴金との交流について考えてみたい。

## 四 瀬戸内寂聴の訪中および謝冰心・巴金との交流

### (一) 瀬戸内寂聴としての中国訪問

瀬戸内は出家後も中国に興味を持ち続け、頻繁に中国へ旅に出かけた。現時点で判明している瀬戸内寂聴が訪中した時期、訪中先などについて表1に

表1 瀬戸内寂聴としての中国訪問

訪中回数	西暦（瀬戸内の年齢）	訪中先	説明・感想
1	1979年6月（57歳）	—（1）	—
2	1980年8月3-18日（58歳）	敦煌	解放後四回目の訪中。敦煌に40年間憧れていたため、行ける今となってもまだ夢のような気がする。
	8月19-23日	上海	チベット行きグループと合流するため、中国作家協会の受け入れを賜り、一人で上海に滞在した。通訳孫華偉まで付けてもらった。
	8月24日-9月4日	チベット（サラ）	チベットもまた、敦煌について、見ぬ恋をしていた所なので、もうすぐその土を踏めるといことが、まだ信じられないほど夢心地である。砂漠の熱風も、チベットの高山病も、一向に怖くはない。旅の苦痛は、愉しみのひとつで、苦勞のない旅など実につまらない。
3	1981年7月（59歳）	北京	—
4	1986年10月（64歳）	山西省五台山	団長を務め、30人あまりの人々と10日間巡礼した。
5	1987年9月（65歳）	シルクロード	—
6	2002年8月10-24日（80歳）	北京、紹興、天台山国清寺、上海	NHKでテレビ放映するための旅であり、当時27歳の小説家平野啓一郎が同行した。北京は十度目、紹興は初めて、天台山には三度目、上海は何度も訪れている町である。
7	2004年10月（82歳）	北京	日本・中国・韓国三国の仏教友好交流会議に、日本側の講師として挨拶講演の役を命じられたため出席した。（2）

出所：筆者が長尾玲子作成「瀬戸内寂聴 略年譜」（尾崎真理子著『瀬戸内寂聴に聞く寂聴文学史』中央公論新社、2009年、pp.339-340）、瀬戸内寂聴『晴美と寂聴のすべて』（集英社、1988年）、瀬戸内寂聴著『寂聴中国再訪』（NHK出版、2003年）、瀬戸内寂聴著『晴美と寂聴のすべて2（1976-1998年）』（集英社、2007年）、瀬戸内寂聴『まだ もっと、もっと 晴美と寂聴のすべて・続』（集英社、2010年）に基づいて作成した。

(1) 「—」は詳細な資料が見つからないことを表す。以下同。

(2) それ以前の二度は仏教関係の縁で訪れていた。一度めは各宗派の僧侶と、二度めは日本天台宗の山田恵諦御座と同行した。天台山国清寺は、天台宗の本山で、日本の天台宗の開祖最澄も遣唐船に乗って命がけて訪れた霊山である。国清寺の雰囲気は清潔で崇高で気分がよいというのが瀬戸内が入った理由の一つで、この寺に寒山拾得が住んでいたという伝説があるから、いっそうなつかしい気分になる、と述べている。『寂聴中国再訪』前掲、pp.132-133。

まとめる。実際には、瀬戸内は表1に示した回数より多く中国に行っていたようだ<sup>55)</sup>。

瀬戸内にとって、中国は何度行っても広い国であり、象を撫でるようなもので、何度行っても実体を掴んだ気は、一向にしなかった<sup>56)</sup>。瀬戸内いわく、敦煌もチベットも巡礼のつもりで出かけるから、怖くもないし、不安もなかった<sup>57)</sup>。1983年6月、瀬戸内寂聴がまとめた紀行文集『敦煌・西藏・洛陽 愛と美の旅2』は講談社より刊行された。

2002年、瀬戸内は80歳の時、NHKの依頼を受けて、当時27歳の小説家平野啓一郎と一緒に、8月10日から24日まで、北京、紹興、天台山国清寺、上海を廻った。瀬戸内は『源氏物語』の現代語訳に取りかかっていたため、しばらく中国への旅を控えていた。NHKの誘いを受け、彼女は戦後初めての中国の旅の時（つまり1973年の時）のような興奮がじわじわと湧いてくるのを感じた<sup>58)</sup>。今回の旅は2003年の元旦に衛星放送で「シリーズ～心が響く旅～『中国 晴美から寂聴への旅～瀬戸内寂聴80歳』」という題で放映された<sup>59)</sup>。2003年、瀬戸内は今回の旅に関する感想などを踏まえて『寂聴中国再訪』という著書をNHK出版より上梓した。本書の中で、瀬戸内は中国人の寛大な心に感銘を受け、心底から中国人に感謝していることを書いている<sup>60)</sup>。瀬戸内は常に戦争反対、原水爆禁止などについて積極的に発言し続けている。瀬戸内の中国に対する愛は止まらない。彼女はこのように表明している。「中国人になって中国に骨を埋めたいと思ったほど、中国が好きになった私の気持ちは、三十年経っても一向に薄らいではいなかった<sup>61)</sup>。」

2004年10月、83歳の瀬戸内は日本・中国・韓国三国の仏教友好交流会議に、日本側の講師として挨拶講演の役を命じられたため出席した<sup>62)</sup>。これは現時点で確認できた瀬戸内の最後の中国訪問である。

## （二）瀬戸内と謝冰心・巴金との交流——謝冰心八回目の来日（1980年4月1-17日）を中心に

1980年4月1日から17日にかけて、謝冰心は八回目の来日を果たした。当時、巴金は団長で、謝冰心は副団長を務めた。一行は京都で歓迎会に参加し、瀬戸内も同席していた。瀬戸内から見ると、73歳の巴金はいつでも渋い表情で、にこりともせず、不愛想で、見るからに頑固そうな面構えであった<sup>63</sup>。その時、瀬戸内は巴金の隣に座り、つくづくこの偉大な作家の風貌に接した。巴金の娘である李小林と謝冰心の次女である呉青も同席していて、瀬戸内はこの四人の世話をした。瀬戸内は当時のことについて次のように記憶している。「宴たけなわになり、名物の阿波踊りが始まったので、私は若いお嬢さん二人（李小林と呉青のことを指す：本稿筆者注）を踊りの中に誘いこんだ。ちょっと踊り方の見本を私が踊ってみせると、お二人は即座に覚えて、いかにも楽しそうに軽やかに美しく踊り出し、そのうち、中国側の全員が踊ってくれた。御老体の巴金先生と謝冰心先生だけは椅子に坐ったまま、見る阿呆役に廻られた。それでも謝冰心は、全身でリズムを取り、首をふって、いかにも楽しそうだったが、巴金先生はにこりともせずただ眺めていられた。その表情がおかしいといって、踊りながらお嬢さんたちが笑っていた<sup>64</sup>。」

『徳島新聞』の招待を受けて、巴金と謝冰心一行は4月13日に瀬戸内の故郷の徳島に立ち寄った。瀬戸内は徳島市出身の唯一の作家として、帰郷して一行を待って、接待の役を担った。表2は謝冰心と巴金一行が徳島で過ごした二日間の行動である。

以上、瀬戸内寂聴としての中国訪問を整理した。また、謝冰心の八回目の来日状況および『巴金日記』を通して、瀬戸内寂聴の訪中状況や瀬戸内寂聴と謝冰心、巴金との交流状況についてまとめた。

表2 謝冰心と巴金一行の徳島での行動

日時	時刻	行動	
4月13日	9:00	出発。西田は旅館に行き、一行を見送る。	
	10:30	大阪空港に到着。	
	11:50	離陸。	
	12:20		徳島に着陸。瀬戸内寂聴、森田茂らが迎える。
			すぐさま乗車し、鳴門の海まで行ったが、何も見えない。
			Schonborgにて昼食をとる。
	昼食後		大江巳之助の家を訪問し、木彫りの人形製作を見学。
			徳島県立城北高等学校に行き、人形浄瑠璃を鑑賞。
	18:00前		パークホテルに到着。
	18:10		沖野舜二が徳島の歴史を紹介。
18:30		森田茂がパークホテルの二階で宴会を開催。	
		宴会後、阿波踊りを鑑賞し、全員が楽しい雰囲気に包まれる。	
4月14日	9:30	出発。農業協同組合（通称：農協）を訪問し、井口会長が農協について説明。	
		杏林房で昼食をとる。	
	昼食後		瓜のビニールハウス栽培を見学。
			富加見宅を訪問。
			大俣農場に行き、テレビ局、豚糞処理工場と養豚場を見学。
	19:00		旅館に戻る。
19:30		下の階に降りて、座談会に参加し、徳島の文化人と交流。	

出所：筆筆者が『冰心年譜長編』（上）前掲，pp.776-777（初出は巴金『出訪日記』）に基づいて作成した。

## おわりに

小論は瀬戸内晴美と中国との関わりを彼女の北京での新婚生活、戦後中国に滞在する状況、帰国後の離婚、日中国交正常化以来初めての文化界代表団の一員としての訪中（1973年2月23日-3月14日）に焦点を当てて整理した。瀬戸内は二回目の訪中時の1973年2月25日に、北京の空港へ迎えに



来た謝冰心に出会った。3月3日午後2時半、謝冰心は民族会館へ瀬戸内を訪ねた。瀬戸内はその日謝冰心に自身の『遠い声』『余白の春』という二冊の著書を贈呈した。訪問中に、瀬戸内は謝冰心に文化大革命の時期における中国人作家としての経験や生活状況について尋ね、メモまで取っていた。

謝冰心は八回目の来日時、1980年4月11日に、京都で開催された歓迎会で出家後の瀬戸内寂聴と再会した。歓迎会では、巴金、李小林（巴金の娘）、呉青（謝冰心の次女）も同席していた。4月13日、謝冰心一行は徳島に行き、瀬戸内は空港まで出迎えた。一行は4月14日まで徳島に滞在した。

日中の文学者のこのような文化交流は日中の国交が正常化したばかりの時期にあって極めて有意義であり、その後の日中友好事業の展開と促進にも大きな役割を果たしたと言えよう。

瀬戸内は、「生きることは愛すること。世の中をよくするとか、戦争をしないと、その根底には愛がある。それを書くのが小説と思う<sup>65)</sup>。」、と言っている。彼女は、円地文子<sup>66)</sup>(1905-1986)、宇野千代<sup>67)</sup>(1897-1996)、野上弥生子<sup>68)</sup>(1885-1985)らの女性作家が年老いても第一線で作品を書き続けていたことに敬服している<sup>69)</sup>。瀬戸内は80歳を過ぎて突然加齢黄斑変性症という眼病になり、手遅れで、右眼は手術してもほとんど見えなくなった<sup>70)</sup>。また、2014年に脊椎の圧迫骨折と胆のうがんに見舞われた。しかし、リハビリを経て、瀬戸内は時間と競争するかのように、ここ数年も多くの作品を世に送っている<sup>71)</sup>。98歳の今でも現役作家としてペンを握り続けている<sup>72)</sup>。瀬戸内は、「私は死のその時まで、自分を失いたくない。出来れば、文学者として、その瞬間の自分をみきわめて死にたい<sup>73)</sup>。」と願っている。

謝冰心は「生命は80歳から始まる。〈生命從80歳開始。〉」「愛があれば、すべてがある。〈有了愛就有了一切。〉」という名言がある。謝冰心は80歳以降から『空巢』『男の人について〈關於男人〉』『お願い〈我請求〉』『感謝を申し上げる〈我感謝〉』などの一連の作品を世に送り出し、人生の最後まで自身の「愛の哲学」（自然愛、母性愛、人間愛）を貫いた。

瀬戸内晴美は女学生の頃、謝冰心のアメリカからの便り『寄小読者』（邦訳『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』）を読み、すっかりファンになり、自身の中国への憧れの大きな要素に謝冰心の文学があった<sup>74)</sup>、と振り返っている。1963年、瀬戸内は小説『夏の終り』で女流文学賞を受賞した。当時、野上弥生子が女流文学賞の選考委員を務めていた<sup>75)</sup>。曾て、瀬戸内は謝冰心を「中国の野上弥生子」と称したことがある<sup>76)</sup>。野上弥生子は戦後日本の女性作家の先駆者であり、敗戦までの日本の知識人のさまざまな生き方や葛藤などを重層的に描いている。瀬戸内が謝冰心を「中国の野上弥生子」と称したことからも、謝冰心の文学が瀬戸内の中国に対する憧れの大きな部分を占めていたことが窺える。瀬戸内は謝冰心を尊敬しているのであろう。

北京に三年間滞在した縁で、瀬戸内は中国史学者、原水爆禁止運動家である今堀誠二<sup>77)</sup>（1914-1992）とも深い交流があった<sup>78)</sup>。この経験がその後瀬戸内の中国に対する感情をいかに動かし、彼女の人生観にいかなる影響を与えたかについては稿を改めて論じたい。

## 注

- 1) 瀬戸内晴美（寂聴）（1922-）。日本の小説家。1922年5月15日、徳島市生まれ。1940年2月、東京女子大学国語専攻部に入学。同大学在学中の1942年8月に見合いをして婚約。1943年2月に徳島で結婚。夫は北京に単身赴任のため、1943年10月に北京に渡り、1944年6月に輔仁大学学長細井二郎宅に仮住まいした後、輔仁大学の教員宿舎に転居。1945年6月に夫が現地召集。8月に終戦。1956年、『女子大生・曲愛玲』で新潮同人雑誌賞受賞。1961年、『田村俊子』で田村俊子賞受賞。1963年、『夏の終わりに』で第2回女流文学賞受賞。1973年、瀬戸内晴美は今春聴（今東光）大僧正を師僧として中尊寺にて天台宗で得度、法名を「寂聴」とする（戸籍上の氏名は、1987年に天台寺住職となった際に「瀬戸内寂聴」に改名した）。1992年、『花に問え』で第28回谷崎潤一郎賞。1996年、『白道』で第46回芸術選奨文部大臣賞受賞。1997年文化功労者、1998年NHK放送文化賞受賞。1998年、『源氏物語』の現代訳を完成。

- 2001年、『場所』で第54回野間文芸賞受賞。2006年、文化勲章受賞。2008年、新潟市主催の第3回安吾賞受賞。2011年、『風景』で泉鏡花文学賞受賞。2018年、朝日賞受賞。句集『ひとり』で第6回星野立子賞受賞、第52回蛇笏賞受賞。2019年、第11回桂信子賞受賞。
- 2) 酒井悌（1913-1992）。1913年9月1日、徳島市生まれ。1939年、大東文化学院研究科修了、外務省留学生として北京に渡る。1940年、国立師範大学に入学。1944年、輔仁大学専任。1945年、国立北京大学準教授。1947年5月、参議院事務局調査部に入る。1948年、国立国会図書館に入職。1950年2月、考査奉仕課長。1954年6月、運営課長。1958年8月、庶務課長。1959年6月、会計課長。1962年4月、支部上野図書館長。1966年4月、連絡部長。1972年4月、参考書誌部長。1973年6月、総務部長。1977年12月、副館長。1980年3月、退職。1992年2月28日、没。死亡時、全国学校図書館協議会会長、金沢工業大学理事。
  - 3) 瀬戸内晴美「三十年目の中国旅行の憂鬱」『中央公論』第88巻第5号、1973年5月、p.209。
  - 4) 瀬戸内寂聴『寂聴中国再訪』NHK出版、2003年、p.15。
  - 5) 井上荒野（1961-）の著書『あちらにいる鬼』（朝日新聞出版、2019年）は、父である作家の井上光晴、母と瀬戸内晴美との長い三角関係を彷彿とさせ、彼らの長きに渡る関係と心模様の変化を深く掘り下げて描写した。瀬戸内寂聴は井上荒野の著書の帯に次の推薦文を寄せた。「作家の父井上光晴と、私の不倫が始まった時、作者は五歳だった」「モデルに書かれた私を読み傑作だと、感動した名作!!」「作者の未来は、いっそうの輝きにみちている。百も千もおめでとう」。
  - 6) 謝冰心（1900-1999）。中国の詩人、作家、翻訳家、児童文学作家、社会活動家、散文家。詩集『繁星』（1921年）、詩集『春水』（1922年）、小説・散文集『超人』（1923年）、児童文学『子どもの国のみなさまへ：をとめの旅より〈寄小説者〉』（1926年）、『お冬さん：謝冰心自選集〈冬児姑娘〉』（1934年）、『女のひとについて〈関於女人〉』（1945年）、児童文学『タオ・チーの夏休み日記〈陶奇的暑期日記〉』、児童文学集『小橋灯』などの代表作がある。中国では「文学の祖母」と呼ばれている。
  - 7) 浩然（1932-2008）。中国の小説家。本名は梁金広、1932年3月に河北省の貧しい家庭で生まれ、1946年に革命に参加し、1948年に中国共産党に入党し

ている。浩然と言う名前は、盛唐の有名な詩人孟浩然に因んで自ら付けたペンネームである。解放後、しばらくは農村で合作社化運動に参加し、後に地方の新聞記者や雑誌「紅旗」の編集などの仕事をしてきた。1956年から小説の創作を始め、農村における農民の良き代弁者として実体験に基づいた作品を多く世に出している。1962年に出版された『艷陽天』が大ヒットしたことで中国の文壇で一躍有名になり、『艷陽天』に続いて1970年に創作された『金光大道』も大きな話題を呼んだ。この二作とも1000ページ前後におよぶ長編大作で、農民が普段使っている素朴な話し言葉で綴られている。

- 8) 瀬戸内寂聴『晴美と寂聴のすべて』集英社、1988年、p. 50。
- 9) 瀬戸内寂聴「宇野千代さんとの半世紀」『群像』第51巻第8号、1996年8月、p. 284。
- 10) 同上、p. 285。
- 11) 同上、p. 284。『晴美と寂聴のすべて』前掲、p. 50。『寂聴中国再訪』前掲、p. 32。
- 12) 「三十年目の中国旅行の憂鬱」前掲、p. 210。
- 13) 『寂聴中国再訪』前掲、p. 12。
- 14) 瀬戸内晴美「幻ならず——北京再訪」『群像』第28巻第5号、1973年5月、p. 193。『寂聴中国再訪』前掲、p. 12。
- 15) 『晴美と寂聴のすべて』前掲、p. 50。
- 16) 同上、p. 53。
- 17) 「幻ならず——北京再訪」前掲、p. 193。
- 18) 『寂聴中国再訪』前掲、p. 78。
- 19) 『晴美と寂聴のすべて』前掲、p. 54。
- 20) 『寂聴中国再訪』前掲、p. 78。
- 21) 同上、p. 14。
- 22) 同上。
- 23) 「日本中国文化交流協会」の成立経緯、メンバー、趣旨などについては、拙論「『後衛思想』の先駆者（謝冰心、巴金の心友であった中島健蔵への考察）」（『愛知大学国際問題研究所紀要』第150号、2017年10月）第1章第2節（pp. 4-10）に詳しい。
- 24) 「三十年目の中国旅行の憂鬱」前掲、p. 209。『寂聴中国再訪』前掲、p. 15。  
長尾玲子作成「瀬戸内寂聴 略年譜」尾崎真理子著『瀬戸内寂聴に聞く寂聴

- 文学史』中央公論新社，2009年，p. 339。
- 25) 『寂聴中国再訪』前掲，p. 15。
- 26) 同上。
- 27) 「三十年目の中国旅行の憂鬱」前掲，p. 211。
- 28) 「幻ならず——北京再訪」前掲，p. 193。
- 29) 倉石武二郎と謝冰心の交流については，拙著『冰心研究——女性・死・結婚』（汲古書院，2010年）第2章に詳しい。
- 30) 土岐善麿の訪中については，小田切文洋「土岐善麿と中国（一）」（『国際関係学部研究年報』第34集，2013年2月，pp. 1-8）に詳しい。謝冰心のこの行動は，卓如著『冰心年譜』（海峡文芸出版社，1999年）と王炳根編著の『冰心年譜長編』（〈上，下〉，上海交通大学出版社，2019年）に記録されていない。
- 31) 同上。
- 32) 「三十年目の中国旅行の憂鬱」前掲，p. 211。
- 33) 同上，p. 212。
- 34) 「幻ならず——北京再訪」前掲，pp. 192-193。
- 35) 瀬戸内晴美「謝冰心女史の手——高齢の身で労働研修 心打たれる真摯な姿」『朝日新聞』1973年4月5日。『寂聴中国再訪』前掲，pp. 17-18。
- 36) 2011年3月31日，4月1日，筆者は中国現代文学館所蔵の冰心寄贈書を調べた。なお，調査にあたって，中国現代文学館募集編集部の計蕾女史に大変お世話になった。ここに記して感謝を述べたい。
- 37) 李季（1922-1980）。中国の詩人。本名は李振鵬，河南省唐河県出身。1938年洛川の抗日軍政大学分校に学ぶ。のち太行山で部隊の政治指導員を務め，1942年陝甘寧辺区の北西部で小学校教員などを経て，1948年延安の『群衆日報』副刊編集。解放後武漢の『長江文芸』編集長となる。1952年玉門油田勤務。文化大革命批判後『詩刊』『人民文学』編集長。詩集『菊花石』（1951年），『生活の歌』（1955年），『忘れられない春』（1959年），『楊高伝』（1960年）などがある。特に長編叙事詩『王貴と李香香』（1946年）は，若い男女の結婚を通して時の流れに従って移行する集団社会の変革を主題としているが，陝北民謡という民間形式を採用して成功した作品である。
- 38) 「三十年目の中国旅行の憂鬱」前掲，pp. 212-213。『寂聴中国再訪』前掲，pp. 17-18。
- 39) 「三十年目の中国旅行の憂鬱」前掲，p. 193。

- 40) 『寂聴中国再訪』前掲, p. 23。
- 41) 和田祥は「謝冰心女史のこと」(『毎日新聞』1973年4月23日)で、30数年前に謝冰心の『子どもの国のみなさまへ:をとめの旅より』をもらって、読んだことを回想した。和田は心から謝冰心の来日を喜んでいた。
- 42) 冰心「中日友誼源遠流長」。底本は冰心著、卓如編『冰心全集』第6巻、海峡文芸出版社、1994年、p. 580。
- 43) 王炳根『玫瑰の盛開與凋謝——冰心與吳文藻(1900-1951年)』独立作家、2015年、p. 351。
- 44) 『『後衛思想』の先駆者(謝冰心、巴金の心友であった中島健蔵への考察)(前掲)で中島健蔵が日中友好協会訪日代表団の来日状況について触れた。
- 45) 井上靖と謝冰心の交流については、拙論「真の『文化交流』とは何か(井上靖と冰心を通して)『名古屋外国語大学外国語学部紀要』名古屋外国語大学、名古屋外国語大学、第43号、2012年8月、p. 167-202 に詳しい。有吉佐和子と謝冰心の交流については、拙論「越境する『忘年の交わり』——謝冰心と有吉佐和子との交流に焦点を当てて」(中里見敬編著『「春水」手稿と日中の文学交流——周作人、謝冰心、濱一衛』花書院、2019年3月、pp. 227-248) に詳しい。
- 46) 謝冰心一行の来日スケジュールについては、『冰心年譜長編』(前掲) pp. 668-673 に詳しい。
- 47) 冰心講話「我在『五七幹校』的生活與感想——在大阪出席新劇人懇談会上的發言」(王炳根選編『我自己走過的路』人民文学出版社、2007年、p. 212。)
- 48) 『晴美と寂聴のすべて』前掲, p. 204。
- 49) 同上, p. 194。
- 50) 同上, p. 232。
- 51) 瀬戸内寂聴「『生きながら死ぬ』生き方とは」、瀬戸内寂聴ほか「信仰を持つことの意義」『信仰の発見——日本人はなぜ手を合わせるのか』2005年、水曜社、pp. 21-23。
- 52) 初出は瀬戸内寂聴「昏き闇より——わが回心の記念の重荷」74・1。底本は『晴美と寂聴のすべて』前掲, p. 202。
- 53) 『晴美と寂聴のすべて』前掲, p. 209。
- 54) 初出は『瀬戸内晴美長編選集』第1巻(月報)。底本は『瀬戸内寂聴に聞く寂聴文学史』前掲, p. 148。

- 55) 第2章で述べたように、瀬戸内は『寂聴中国再訪』（前掲）p. 23で「1973年二回目の訪中を皮切りに、毎年のように中国を訪れるようになった。」、同書p. 29に「(北京に:本稿筆者注)十度も訪れる度、必ず歩いた王府井の姿も、今は全くかき消えていた。」、同書p. 132に「天台山へは私は三度目である。」、同書p. 158に「上海は何度も訪れているが、今度が一番がっかりした。」、また、『瀬戸内寂聴 略年譜』（前掲、p. 340）に、瀬戸内は1980年（58歳）8月の中国（敦煌、チベット）旅行は解放後四回目の訪中と記載している。
- 56) 『晴美と寂聴のすべて 2（1976-1998年）』前掲、p. 44。
- 57) 同上、p. 45。
- 58) 『寂聴中国再訪』前掲、p. 3、pp. 23-24。
- 59) 同上、p. 7、裏表紙。
- 60) 同上、p. 14。
- 61) 『寂聴中国再訪』前掲、p. 14。
- 62) 「瀬戸内寂聴 略年譜」『瀬戸内寂聴に聞く寂聴文学史』前掲、p. 347。
- 63) 『寂聴中国再訪』前掲、p. 160。
- 64) 同上、pp. 160-161。
- 65) 初出は平凡社編、伊藤千晴写真『瀬戸内寂聴の世界:人気小説家の元気な日々』平凡社、2001年。底本は『瀬戸内寂聴に聞く寂聴文学史』前掲、p. 302。
- 66) 円地文子（1905-1986）。小説家。代表作『女坂』は戦時中に刊行されているが、戦後は少女小説、通俗小説などを生活のために多く書き、1960年代からようやく評価されるようになる。日本の古典文学については、平安朝から近世まで詳しく、女を描いた小説と『源氏物語』など古典の造詣により評価され、文化勲章を受章した。『女坂』（1949-1957年）、『ひもじい月日』（1953年）、『妖』（1956年）、『なまみこ物語』（1959-1961年）、『朱を奪うもの』（1960年）、『源氏物語』（1967-1973年、現代語訳）などの代表作がある。女流文学者賞（1953年）、野間文芸賞（1957年）、女流文学賞（1966年）、谷崎潤一郎賞（1969年）、日本芸術院会員（1970年）、日本文学大賞（1972年）、文化功労賞（1979年）、文化勲章（1985年）という賞をもらっている。
- 67) 宇野千代（1897-1996）。小説家、随筆家。多才で知られ、編集者、着物デザイナー、実業家の顔も持った。『色ざんげ』（1935年）、『おはん』（1957年）、『生きて行く私』（1983年）などの代表作がある。1980年代からは女性向けの恋愛論・幸福論・長寿論などのエッセイを数多く書いた。また、野間文芸賞（1957

年), 女流文学賞 (1970 年), 日本芸術院賞 (1972 年), 勲三等瑞宝章 (1974 年), 菊池寛賞 (1982 年), 文化功労者 (1990 年) という賞をもらっている。

- 68) 野上弥生子 (1885-1985)。小説家。大分県臼杵市の出身である。14 歳の時に上京し, 明治女学校に入学。『ホトトギス』に『縁』を掲載して作家デビュー。英文学者・能楽研究家野上豊一郎の妻であり, 夏目漱石の門下である。『海神丸』で文壇的地位を確立し, 広い社会的視野と文化的教養主義を統一した作風を築いた。文化勲章受章。法政大学女子高等学校名誉校長を務め, 「女性である前にまず人間であれ」の言葉を残す。『真知子』, 『迷路』, 『秀吉と利休』, 『森』などの著作がある。
- 69) 瀬戸内は『瀬戸内寂聴に聞く寂聴文学史』(前掲) pp. 148-149 でこのように言っている。「円地文子さんは七十代で引き受けた新聞の連載小説『食卓のない家』で連合赤軍事件を扱われた。宇野千代さんが『生きて行く私』を完成されたのは八十五歳でしたね。『死ぬまでに, もう少し納得できるものを書きたい』と私にもらされたのは, 九十を前にされた頃だったはずで, その謙虚さに言葉を失いました。野上弥生子さんが『森』を完成されたのは, 百歳目前でしたが……。皆さん, ご自分が生きた時代の現実から, 最後まで関心を逸らされはしませんでした。長生きして第一線で書き続けるためには, この精神の若さが不可欠でしょう。」
- 70) 『瀬戸内寂聴に聞く寂聴文学史』前掲, p. 321。
- 71) 2014 年以降, 瀬戸内寂聴は以下の作品を上梓した。『五十からでも遅くない』(光文社, 2014 年), 『死に支度』(講談社, 2014 年), 『寂聴まんだら対談』(瀬戸内寂聴, 山田詠美ほか, 講談社, 2014 年), 『日にち葉: 寂聴あおぞら説法 みちのく天台寺』(光文社文庫, 2015 年), 『わかれ』(新潮社, 2015 年), 『これからを生きるあなたに伝えたいこと』(瀬戸内寂聴, 三輪明宏, マガジンハウス, 2016 年), 『老いも病も受け入れよう』(新潮社, 2016 年), 『求愛』(集英社, 2016 年), 『句集 ひとり』(深夜叢書社, 2017 年), 『わたしの好きな仏さまめぐり』(マガジンハウス, 2017 年), 『瀬戸内寂聴 いのちよみがえるとき』(NHK 出版 DVD 付き, 2017 年), 『生きてこそ』(新潮新書, 2017 年), 『あなただけじゃないんです』(自由国民社, 2017 年), 『花のいのち』(講談社, 2018 年), 『愛することば あなたへ』(光文社, 2018 年), 『命の限り, 笑って生きたい』(瀬戸内寂聴, 瀬尾まなほ, 光文社, 2018 年), 『命あれば』(新潮社, 2019 年), 『寂聴 九十七歳の遺言』(朝日新書, 2019 年), 『はい, さ



- ようなら。』(光文社, 2019年), 『97歳の悩み相談 17歳の特別教室』(講談社, 2019年), 『悔いなく生きよう』(祥伝社, 2020年)。
- 72) 今のところ、瀬戸内は朝日新聞「寂聴残された日々」、群像「その日まで」、京都新聞「天眼」、新潮「あこがれ」という四つの連載をもっている。(瀬尾まなほ『寂聴先生、ありがとう——秘書の私が先生のそばで学んだこと、感じたこと』朝日新聞出版, 2019年, p. 145)。
- 73) 『晴美と寂聴のすべて』前掲, p. 230。
- 74) 『寂聴中国再訪』前掲, pp. 17-18。
- 75) 『瀬戸内寂聴に聞く寂聴文学史』前掲, p. 19。瀬戸内寂聴, ドナルド・キーン, 鶴見俊輔著「野上弥生子と『迷路』」『同時代を生きて——忘れえぬ人びと』岩波書店, 2004年, p. 101。
- 76) 「謝冰心女史の手——高齢の身で労働研修 心打たれる真摯な姿」前掲。
- 77) 今堀誠二(1914-1992)。東洋史学者, 原水爆禁止運動家。1914年10月27日, 大阪府生まれ。1939年, 広島文理科大学(現広島大学)史学科卒業。その後, 北京師範大学講師となり, 中国の封建社会制度の研究を進める。1951年広島大学教授, のち広島女子大学(現, 県立広島大学)学長となる。1949年広島平和擁護大会議長につき, 原水爆禁止運動を積極的に推し進め, 同運動の理論的指導者として, 原爆の実態調査や広島大学平和科学センターの設立に尽力した。1980年, 『中国封建社会の機構: 帰綏(呼和浩特)における社会集団の実態調査』で日本学士院賞受賞。1992年, 谷本清平和賞受賞。著書に『原水爆時代: 現代史の証言』『毛沢東研究序説』『中国封建社会の構造: その歴史と革命前夜の現実』『中国と私, そしてヒロシマ』『中国封建社会の構成』などがある。1992年10月9日, 没。
- 78) 瀬戸内寂聴著『死に支度』講談社, 2014年, pp. 157-161。